

談

海

自寛文元年
至二年

八

内閣文庫	
番 號	和 35476
冊 數	14(7)
函 號	150 92

内閣文庫			
一五〇函	一四	三五四七六	和
一五架	冊	號	書
		類	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

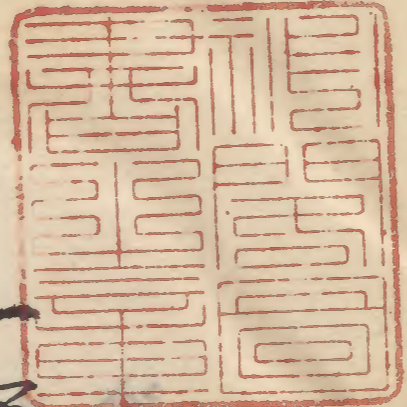


© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

周々



後海牙

万治四年 辛改元有テ

寛文元年

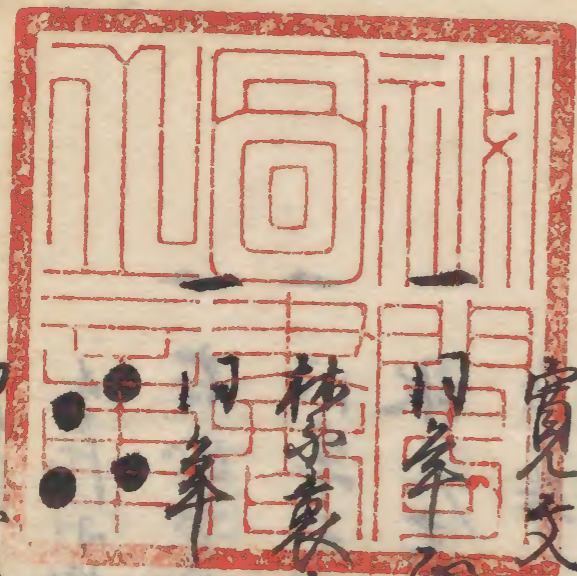
二月十六日

林永森 茨上云家元の宅 每寺社屋焼失

日辛 友と云

如くのよくの尻尾是出海

御名代田春出と云忠由系清と御名



龍舟和檣卒完及礼舞真肉中合之法所
生海小終之関門口江 任付之

一 右出中云志由徳段渡急丹波書法 任付之

一 日辛七月廿九日

水戸貞門彩房之遊去去秋六十九果儒法
法壽之云之透穀望吉田と云即幸遠之

一 御出柵行烈 庚申

挑灯

長柄指本

上下表
徒士共人

旗炮二十挺

挑灯

弓指挑

騎子二十騎

上下表
目付

長刀具足

蓑箱

挟箱 日朋

是少孫

神

新科地ノ名元
新科地ノ名元
新科地ノ名元

中間二人

香炉 横山先子
大指人

新科地人三人
イロラ表
イロラ表

沼鏡

沖権

加このこの八人
左方八人
加このこの八人

す池
立池
支字

地灯
馬

田人元
道元
後物元
日付元

近習元
小細元
廣子元

六人元

六人元

筑末清教寺
築清寺左所

日燈

押者
押者

騎馬

約井元
イロラ
赤林元

押者
押者

惣代元

奉馬

以上

一日年尚年又十年以来の豊定年と古老の

人戸あり不涸

之及小編の長サ八尺を之とす。後久林

柳原城中より内小編小枝をとりて城中

持来る本末と云々人八守有枝二年分本編

小穂百七粒位分之二ノ枝百七粒位分之二の枝小

五粒之位分之又留士の根沼小之町四町の

田地ありま向小穂小穂分之粒尚年

の早稲より去りて人二寸五分なり

一 日辛六月

麻鴉の事始末てり松ハ尚幸の秋ハ一粒
百をいねんを流披せせんぬんの本実成
まド又赤えんぼり有る事ありしりるう
きく人みな多と云をよとね思ひり
け秋滋せんぬん小実ありとむ赤粒粒
とるなり場中の中ハ右に毎冬年終ハ

往古如く多知し有る小粒

一 日辛五月

諸河ハ油枯の様種と云ふ小希代の事あり
りり右後種を赤原堂の別當ハ去意坊と
らふて阿宗の僧之能宗ハ僧片をびんをけて
そはる朱のともくねりし小名守てひか
ま意といひる本ハ多智の寺坊坊と云
りりこれをも才子の昔海と云ふ小僧也

伴の詩翁控況（お）系流波——已々
さ成船のしせめて才子号海を云之出家
のま似と波させ度思のゆけられ祈れを
御を主甲斐なく——と刻日くふ慈のゆ増
多れをそ迄の出家達を括て師の坊りの
小僧小多くと教訓して誅をりれハ此
なる海多らゆら氣多かろて懐より硯を
取出しおをかく小を文字千人小をこり

何事も無成せなり——是いかふと存れハ
小僧向天竺のみ字ハゆゆらんらんて
と云て又懐中の志き取中ハ隅ハ波の
付ありと云ハ——かがりて誼を握り一ツ
歯の波の足詰を履て目見せおと詩翁
控況の常り福り流ハ思多凡史の荒生
等能ハ申ゆ——を家を頼之良所をせ
かかすゆゆす——とて記よりハ是——り

早く湯の花をきれと志や海より剛
 志高むぬせられし近隣を村の病人をり
 どの集りておのれ〜う病あり金也
 初とまれ、忽を是りて息入ぬけり
 近世他も恐れながらこれを盡一夜の
 限りなくし寺解業の神也は〜福富もこ
 ぬる牡丹の花〜と〜うてさる海をさと
 一の森と目をきり〜う急の時を火を禁〜

身は浅あかり徳を女をいといざりたる
 只〜日知れぬさるるをの之好
 陰ひかり思〜る〜此の多かる山也
 此〜侍りぬ

一 日年勢別 桜坂の七〜衛と〜石の釈小
 船以水主たふ以上十人宗おみ人紀伊
 於宣々の江戸弟也〜乃上宗を十五人

一 宗子ノ十二月廿二日せ中ける虫居る〜か
 布虫あ住らうり〜と〜ん 是ハ空ら加〜源流〜と〜ん

一 衣類は裸小紋の袴を毛の方を内として総合
細袖小紋一着として小紋の袴を総合
毛の方を外として着し総合のどくお合
せふはかる

一 男乃きひの言サ日如の丈ていの人から七八寸
ほど高くして身おを白浪の環を付り
髪をむ肩の通りおを揃えて免おで足お
おけをすひおはと長くはたかる

一 男女の揃えはけおりおをサ方合り申せを
少知り石中七半人社の内お女は二人おえり
一 袴おを短れおをすり斗り意多の皆通の着
ととと多り骨違欠前んとははるのりおと
トおりトおりおとして密りおを後通人お合
中おり何と讀合り多らん歎の皮せお板おの
内おけ入りおを申おしては皮おをトおり
区トおりお又ららおとトおりお

去尺の戸をせ出舟して傍より風烈疾
 吹出て遠列船居上の片淡津と云舟
 旗かけ留て七日日の船西風吹船り
 和しき多りあり船塚あとをりいれ又も唇
 方小風小吹ら梳を吹折しきて船の梳
 子一船りりり船らずして船居七日船り
 して船梳せし月此所より米或石の物そ
 下船程に烈風少る夜舟の舟居の方

吹也初漸く九月の風流りそふとい西風吹船り
 九日の下は流されし後高野の方を流して七月
 十日と吹流されし事

一 翌年せし二月末別方舟七月廿三日の光
 を見せしと有るその内二二夜かきふ少しの内
 見し船は多しゆしと又ともなく見し
 たはて七月廿日大子船居宗宗うけし船
 破せうけ船はともて網を船の角に掛切し船

一 舟小宗磯道より白きまの舟の
有る水流出るる川陽小谷屋二軒此屋の
主の内人三人舟中の我をせ見りて
一人は何方へ廻らんありて二日色を細く
主後方を見りて方々人集りて三日色を細く
舟中の内人三人舟中を廻りて

一 主舟人を八何もらす舟の木の末を急ぎ
舟の均ハ三舟子とト木の内此舟の舟を丸く

一 して船先を細く絞し共ハ三人舟中の
舟の舟子らの舟の舟の舟の舟を割りて
木の末方があてられ此口ツ舟の根大根
舟の舟の舟

一 船先を白きまの一人舟斗見りて連在の舟
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
とト舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟
とト舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

皮之仍く出しど申法度の由る此箇の
右段の記ハ蛇夷ハ一撰記ト云として此類の
一尋え此方の小蛇りあやの去何也大きく
此方の蛇老耶と云此方之此方の虎杖を二丈
解之此方竹の根えんやの百合草のをか
計之外大きく此方の之卵大母を此方の
皆之海ふと申あは葉ハ擬木の葉なりと云
ちのひさく此方の事

- 一 鳥類此方のに語りあやの蛇を鴨鴨と
大さの此方の事
- 一 靴を此方の名ハ此方大きく此方の席ハ蛇夷を
此方を此方の事
- 一 海を此方のに河ハ鯨多く此方の何也
らら討めて其後此方の蛇成よの言箇の此方
- 一 川ハ蛇多く此方の沙テハ手捕り此方
- 一 あり食ふハ鳥類ハ食ハハ鳥也見せ此方

知りおしゆる

一 舟をとりて舟小舟人立所を健来之日海
舟座の舟舟命を舟舟の舟舟の舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

一 舟をとりて舟小舟人立所を健来之日海
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

一 舟をとりて舟小舟人立所を健来之日海
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

一 舟をとりて舟小舟人立所を健来之日海
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

一 曰 西 高 田 之 二 十 百 里 高 田 之 船 夷 八 七 十 二 星 之
 一 船 前 之 何 氏 帶 也 三 加 七 名 物 也 而 其 也 以 及 之 成
 一 手 形 以 り 也 事 也
 一 船 夷 人 物 語 以 小 人 語 之 度 之 船 夷 古 也 盜 之
 一 事 以 り 中 之 也 一 事 以 之 船 夷 水 舟 也 元 也 舟 也
 一 之 盜 小 事 也 而 之 船 夷 語 小 人 語 也 舟 語 百 里
 一 之 事 也 舟 中 之 古 也 盜 以 之 滴 波 以 也 舟 以 り
 一 舟 中 之 事 也 一 事 以 之 小 人 語 也 舟 語 多 也

此 舟 之 語 人 獨 知 之 通 也 舟 中 之 語 也 舟 中 又
 風 之 吹 也 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 人 之 語 也 舟 中
 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也 船 夷 人 語 舟 中 之 語
 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也

右 十 六 人 之 水 主 之 實 文 元 世 九 月 八 日 以 上 居
 舟 中 之 語 也

舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也
 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也
 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也
 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也 舟 中 之 語 也

下田 舟台与改之需

右三人分及工尸の書付め件

談海禪卷之十五終

談海才十六

一 寛文元年伊勢の堤ヶ系夥し

一 先年凶厄詠 任舟の面々 英國分之費

豊前豊後 筑前筑後 杉田善右衛門

肥前肥後 大隅薩摩 斎田教馬

日向 豊後 日向 蛸川喜左衛門

因以上指す之團

播磨 備前 備中 備後 川筋丹波等

因坊 少門 莫作 但言 石尾 七之傳
因幡 伯耆 出雲 隱岐 三上 串之傳
右見 安藝

右拾遺少國

山城 大和 攝津 河內 津田 平之傳

和泉 伊勢 伊賀 志願 布多 丹後 高

紀伊 淡路 阿波 讚岐 依上 播磨 高

伊豫 古依

右拾遺少國

越後 越中 越前 加賀 能登 上之傳

越前 佐渡 若狹 丹後 城上 串之傳

丹波 近江 中根 上之傳

右拾遺少國 林 丹波 高

陸奥 出羽 常陸 赤井 次之傳

右 三之國 新 右之傳

武藏 相模 上總 下總

安房上野中野甲斐大井新倉
伊豆駿河遠江高林河内
三河尾張美濃飛騨信濃

右拾六ヶ所

一七百石 内三百俵ハ
此處有之

駿河守子

山口出雲守

元永徳記の事以寛文元世八月十日
左馬込屋以所之淡路守と改布知熱原口
新規三子石出雲守に下之

一六百俵

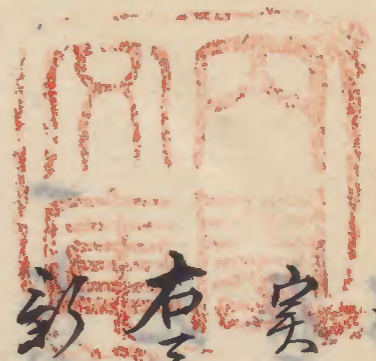
滑田洋藤

元永徳人從處乃之寛文元年八月十日
左馬込屋以所之淡路守と改布知熱原口
江下之新規三子石淡路守に下之

一七百石 内三百俵ハ
此處有之

金田熱原

元永徳砲乃之寛文元年八月十日
右馬込屋以所之本知熱原に下之
新規三子石熱原に下之



一千石 小姓能子以 大久保玄内

実父安信尾高の子 寛文元年八月十日

右高以高 信濃守と改之 甲初勅於江下之

新親三子石 和泉守、信濃守 甲之 金田源高

一千石百石 直洗袍以 信濃守 黒田源高

実父直高平高の子 寛文元年八月十日

右高以高 信濃守と改之 甲初勅於江下

新親三子石 信濃守、信濃守 甲之 黒田源高

一千五百石 直洗袍以 渡辺玄内高

寛文元年正月九日 高以高 信濃守と改

甲府直洗代高 甲初勅於江下

新親三子石 信濃守、信濃守 甲之

去ル子八月十日 石直洗袍 妻木元高

都合三子石 信濃守、信濃守 甲之 作高

寛文元年十月廿八日 江下大火之 信濃守

不家と武家塔と 男不可形高

いふと京とをいひなげし

右今年江戸を京郡と焼くれり

一 寛文二年壬寅三月又日六日の月有明る

一 日去日松平伊豆守信徳死去仍年六拾七歳

一 日廿日午刻大地震翌日入日の又母の如く

夕日の市朝二折見えゆなり

一 尚年又伊勢の如け系連日駱

一 尚年京都大佛七尺傾きり是中の柱の

手びり朽やぬる今年外此也一はぬれ七寸

角子布斗入の由佛の中せ立換せ角柱小

てかゝらとゆゆなり

一 素乾つて家八十六軒并古徳臣十六ヶ所焼り

由死人七人

一 寛文二年三月廿七日壬子の代友一色

内宿及多中勘定之候有候母梅三守務共定

各舎合の時揃へも度く内宿外に不審候

おのほろ私曲の中分取がくくそ席を揃う
切てかり戸の心座中の面々めき合はる
内宿女を江角のしよ田をみる浅手原
志くくくして揃うる死ス内宿女法外
作法流云儀つよく出雲の江成一門中
忘かりし者の方事付一上上は江舟舟
内宿女舟日助の堀名流也松平和泉守
宗久の歌止又波長浦原の五五の代の面々

江舟舟の歌 五五の代は定ては江舟舟
作舟々

- 一 日辛六月十日江舟舟安宅丸の江舟舟
うけし世 將軍家綱公御舟舟依
諸大君の江舟舟舟舟の舟舟舟舟舟舟
出しこれとさむかり廣子三侯川舟舟舟
世記丸舟舟舟舟
- 一 天地丸八拾丁舟舟一丈龍丸舟舟丁舟舟

一 龍五丸 大指丁ぶら

右三艘の正和より大幕をえーらりー此舟下
吹黄も外多々の出ー此う正鉄炮に六指
解の多々の袋をかけこまと屋小か号元正
正長刀の立笠 誠とあり交又物之前代末の
るりて之天地丸と 於軍家正なる百と安丸
維重しふ存存川大隅と屋交のた太佃時
宿る 成舟中ら刻 御膳正石工と大龍丸と

此語元龍五丸と此書代の歴々元と外なる

御成の時出り此舟和と西正徳と旗本元之け日

快晴正城崎斜に次終日舟和抱正徳

還舟之翌土日此和舟の向舟音部を

営中の此石と此初増千石なりと真か正徳

小舟目か正徳

一月十二日野原日光志毎夜風去八日より

雨脚止止正和一依之正和也 彼地正和

由目付の田中三彦為溺死年 貞紅の侍并
下くはかけて以上推人 流死之山最日光
所家九族形余流失ス水死の者百三拾余人
之内以體死の位進

一月晦日大雨山 諸別之結山最進めて道に
高浪亦上テ川流急推余形正座に
熱気今年ハ津浪亦去年之上諸人合ハリ
之謂也居る小舟之 所之 所之 解蟹多く

造ありたり是之 湯熱之 旧例ありといふ
淑小例年小船りて 解蟹多く 亦く小遠より
ありし果して高浪上テルり
一月年京形小おて 法親宗 福得る 宗海哉
許と申

一 今度 福祥寺と以テ 分分ら 穿 毘盧の上
口海依お寛 双方守合 戸封年 越る 不浪
い度之 依 寺 社 形 結定 意の上ハ 自宗 他宗

の不及備或ハ作才或ハ寺能又ハ山林坊
目赤の海所元未定ハ依の中分寺ハ先叙
分寺社在坊の外空他斗と条お島所ハ付
子細河々々海候年来諸人の存無事
一 以之依当座二遠紀改之而以之ハ打擲
半紀事生の推子ハ中實整依能成半依能
以後二遠紀内々々付所中ハ能立能依之
福禪寺也七内ハ能立本寺也其能立能依也

本末之記據不分明 由來乃揚々場 意意及
一分の形ハ能立之改以被是之能立能依之
義后連二条ハ能立能依也其能立能依也
寺之用能立

一 福禪寺ハ海所ハ去九百海大京江ヶ本寺ハ
以之能立能依也宗海能立能依也其能立能依也
孝一能立能依也其能立能依也三能立能依也
其の能立能依也其能立能依也其能立能依也

鉢置院の沙汰不承究以宗穿舎中付着之
尤以之決事擲儀為宗他宗の母系別流中宗
所とあてて又合縁入多きりり流布上下
存りハ福禪寺以ハ口論之為中人條双方同衆
中付之とけ上より宗海の沙汰を治定於龍披在之
ハ批判不承及以号の印寺一とを達申
右と申中分ら京所中双方宗のと擅方と
小の事と種々申分多仕りて也と申上人親承法

龍法堂の多業之條以上龍中仕出を
宗門法堂衆科不恒と宗双方札明之上後
又倭意度二行衆科者之

寛文二宮 年六月十日 奉行

土下惣所代

一 右と在牧神儀後寺宗承梶田重と助と多
者世登久の流り不承しりる
いかに梶田加らたハ沙汰は沙汰ハの侍

私欲のまゝの所人の金や半
のりし取及多り一巻 禁中炎上の
内室に所必竟念慈子の車実来と
もがられぬし証文是ハ宗海の所
ハ只念られとの所とていしては
ひらひの子のき福をハ物也佐海
のしれどもよとて証書也
おの名もふりよりてかきりたり

佐海のりんるをハ世の宗海

佐海も奥方日蓮宗にれを

宗海となし云れを所のもの

日れを法花の如き持ふ

一 尚幸ハなく大地辰玉ハ不陸を之に京に

豊國斗と一夜を之に佐に一人外と

と云り

日年酒み讃波と入空尔率去若根披

少於志勝の事なり

一 日辛十月八日親征の事海をいし

年斐多なる小島なる島 年斐多なる

一 年斐多なる島なる島

又 増房の事相事なる島 相事なる島

右しある事

系屋手は而系屋手なる島 系屋手なる島

古子なる島 古子なる島

狂奇

吹上げをいし清りといと居と一

毎梵一不戒てさうむ古子なる

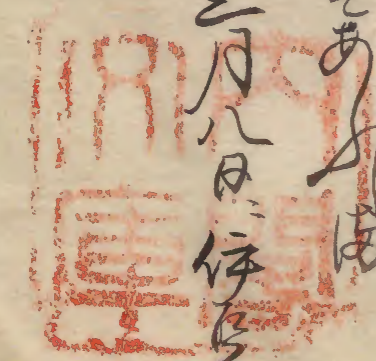
年代さう世成古子なると思ひし不

かゝ海す記めふ今とあり外海

右系屋手は而系屋手なる島 三月八日 係屋

西大崎に流籠水はなり

談海漫笔之十六終



Handwritten text in a cursive script, likely a signature or name.

Handwritten text in a cursive script, possibly a date or a reference number.

Handwritten text in a cursive script, possibly a title or a specific name.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

